

目指す学校像

地域とともにある

勢いのある学校

No. 36(R2. 1. 28発行)文責 校長 福田雅也

高き志【こころざし】

支えるスポーツ

【目の前を走り抜ける聖火ランナー、沿道の多くの人垣と歓声】…3歳だったはずの私の頭の中に鮮明に残っている記憶です。今考えれば、その年は1964年だったはずです。場所は京町の旧国道3号線、京陵中学校横の交差点でした。私は、前回の東京オリンピックの聖火が熊本を走り抜けるのを、目の当たりにしているのです。

しかし、私にとって、前回の東京オリンピックに関する明確な記憶はこれだけです。当時、各家庭までにはテレビは普及していません。大会の様子をリアルタイムで見えることはできませんでした。私の家には車もありませんでした。どうやって京町まで行ったのか覚えていませんが、わざわざ家族で見に行ったことと沿道の人の多さで、何か特別な事が起きているのだと感じたことは覚えています。

いよいよ2020年、東京オリンピックを迎える年となりました。私は昨年度、「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント市民フォーラムin熊本」という会に参加しました。その中で行われたシンポジウムは「支えるスポーツからオリンピック・パラリンピック・ムーブメント」という題名でした。そのシンポジウムでは、「堀内規生（ほりうちのりたか）」という方がシンポジストの一人として登壇されました。この方の肩書きは「ブラインドマラソン・ガイドランナー」というものでした。ブラインドマラソン・ガイドランナーとは、視覚障害者が出場するマラソンにおいて、出場選手の横を伴走し、ひもでつながった手と言葉で選手をガイドをしながら一緒にゴールを目指すランナーのことです。堀内さんは、リオデジャネイロ・パラリンピック、女子ブラインドマラソンで銀メダルに輝いた「道下美里選手」のガイドランナーということでした。

教師として体育、スポーツに長年関わってきた私にとって、お話の内容はとても興味深いものでした。もちろん、ガイドランナーとしての苦労や気をつけていること、道下選手のこと、パラリンピックでの銀メダル獲得についてのお話等も大変貴重な内容だったのですが、私はそれ以上に興味をそそられた部分がありました。それは、堀内さんが「トップアスリートを目指しておられた」という事実です。そして、その夢が叶わなかった後、堀内さんが選んだスポーツとの向き合い方が「ガイドランナー」だったということでした。

道下選手のマラソン最高記録は2時間56分14秒です。当然ですが、ガイドランナーは、一緒に走る選手よりも走力が高くないと務まらないそうです。ということは、ガイドランナーとはいえ、堀内さんは、かなりの走力を維持するため、自身のトレーニングを積み重ねておられます。トップアスリートには及ばないまでも、そうして鍛えた自分の走力が、道下選手のリオでのメダルを支え、その他の大会での素晴らしい戦績につながっている。堀内さんは、このことにやりがいや生きがいを感じておられるのでしょう。

少し専門的な話になりますが、来年度から全面実施となる新しい学習指導要領の小学校体育科の解説の中に次のような記述があります。

「体育の見方・考え方」とは、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」であると考えられる。

このような考え方は、小学校体育科では今回初めて示されました。これまでは、あくまでも運動をする主体者としての記述しかなかったのです。この文章からすると、文化としてのスポーツは「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方があることを、小学校段階から子どもたちに伝えていく責務が加わってきたようです。そうであるのなら、様々な形でスポーツとの関わりをもち、豊かな生活を実現されている堀内さんのような方の存在を、私たち指導者が知っておくことはとても重要だと感じたフォーラムでした。